なんだか私の目の前にいる初代プリキュアが異常

おーり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初代様のイラストですんげぇのがあったのをニコニコする静画で見つけちゃったので書きました

目　次

なんだか私の目の前にいる初代プリキュアが異常 ―――――― 1
テンプレ転生したのに笑えない ―― 8

なんだか私の目の前にいる初代プリキュアが異常

「闇のチカラのシモベたちよ！」
「さっさとお家へ帰りなさい！」

……初代って、こんなだったっけ？

二次元の世界に転生して早くも１０年。

此処が色々な世界の混合物で、埼玉の端には麻帆良学園があり、木更津の辺りにはＩＳ学園と月光館学園なる人工島があり、日本一有名な週刊漫画雑誌では『ピンクダークの少年』や『ドラグ・ソボール』なる漫画が連載していたり、動物の村の安全を守る自らの頭蓋を掻っ捌いて食べさせてあげるヒーローの名前がアソパソマソであったり、お茶の間の話題を掻っ攫っている今一番有名な芸能人は『ドン・観音寺』であったり、ニューヨークにヘルサレムズロッドなる異界の街が出現したりと、大きなものから小さなものまで、いろいろと頭を抱えたくなるような世界であることは既に知っている。

去年も、ジュエルシードなる飛来物と闇の書なる厨二まっしぐらで地球がマッハだったところを、クラスメイトの高町さんとテスタロッサさんがご近所の高田さんというボ

ディビルダーと八神さんらと協力して解決に導き、ご同輩の泉井くんが思いの外ヤッベエ化け物レベルの転生者だったことを改めて知り、意外と地球のピンチってそうそう無いんだなと、あと転生者ってけっこういるんだということも知ることが出来た。

胃痛と頭痛がダブルで痛いが、さほど深刻でもなくなっているので苦痛というほどでもない。

話を戻すが、私は生前、一応はニチアサ世代であったので、それがどういうモノなのかは把握している。

中学生女子が不思議生物を拾い、光のチカラでスーパーヒロインに変身する、という大元を辿ればセーラー服美少女戦士辺りに逝き尽くのではと予想される日曜朝のテレビアニメだ。

基本的に幼稚園児が観る予定で企画されているはずなのに、いい年を超えた大きなお友達からの支援がスゲェやつである。

よく覚えてはいないが、わかりやすい勧善懲悪の物理特化ヒロインではなかったかな。

『ザッケンナー！』

お相手はあの黒々しい影が寄り集まったような巨体か。
ああまで大きいと自重で自由に動けないかと思われるのだが、年端も行かない少女の拳でぐらついているのだから見た目に反してそれほどの物理作用も働かないくらい軽いのかも知れない。
ああ、こちらが１０程度なのだから、年端も行かない等と言うのは間違っているかも知れないな。
さて、……現実を見るか。
今更だが、いわゆるプリキュアと呼ぶべきであろう彼女たちの恰好が、些か以上に異常である。
まず布地が少ない。
肌は惜しみなく晒されて、隠すべき局部がギリギリで隠れ見えているスリングショットなる水着（モノ）に似た紐ビキニ。
肩ショルダー、手套、チョーカー、アンクレットにイヤリングと装飾過多だが、それが少女の裸体を隠せているかと言えばそんなわけがない。
縦に大回転してしゃがみ込んで着地する仕草で、豊満な尻肉がむっちりと強調されている。
というか丸見えである。

そして、既に言ったが肉感が女子中学生に全く見えない。
乳房は動くたびにばるんばるんと風船みたいに揺れるし、尻も太腿もむちむちとして見る者の情欲を無駄にそそるであろう。
……これほんとに女子中●生？
思わず伏字にしてしまうが、カテゴリ間違えてないか。
これだと水●敬ランドに無事就職してしまったエロ漫画ヒロインだぞ。
なんだか不敬だが、言い得て妙な表現に至ってしまって申し訳なさと憤慨が同時に来る。
いつから絵柄担当がモグ●ンになったんだ。こんなの地上波の日曜朝から放送できるか。

「――ふぅ、大丈夫だった？」
「怪我は無い？」

少女たちが戦闘を終えて、画面隅で傍観していた私に声をかける。
残念ながら認識されていたらしい。
前屈みにならないでください、谷間が強調されて目に毒です。

色々と危ないので、あんな恰好の人に近づいてほしくは無いのが本音である。

「ええ、はい、大丈夫です。お姉さんたち、おつかれさまでした」

ぶっちゃけなんと云えばいいのかわからなかったが、内心引き気味で笑顔を向ける。

引き攣ってないことを祈るばかりだ。

「……うわっ、かわいい」

「……なぎさ、気持ちはわかるけど、無茶をしてはだめよ?」

げぇ。

と、内心で呻き声を上げる。

彼女たちの小声で自らの転生特典が発動したことを確認した。してしまった。

私の特典はけっこうなパッシブタイプで、望むと望まないとに拘わらず自動的に発動し、また自身で強弱の都合もつけられない。

ちなみにニコぽなどの類ではなく、こうした女性に発動してしまうのは副作用の方だ。

そこも強制力と言うほどまでは行かず、僅かに好感情を抱かれるといった、ささやかなレベルのモノだが。

……正直、呪いとしか認識していない。

私の外見でもこうなると、日常生活すらままならなくなるのだから。

……というか、コレは主に『人外の女性』に対して発動するのだが、彼女たちは人間ではないとか……？

『変身ヒロイン』というカテゴリ上の生物に分類したりするのだろうか。

「いやー、ちょっとだけ、ちょっとだけ抱きしめるくらい許されないかな？　みたところ女の子っぽいし、スキンシップだって」

「あの制服は聖祥大付属よ、つまりは私たちの学園と同じレベルのお嬢様学校。下手に関わって通報されたら今後に支障が出るのよ、わかって？」

手のひらをわきわきと蠢かしながら茶髪の方がにじり寄る。

……地味にピンチだ。

間違っても性別がバレることは避けなくてはならない。

私は前世では女性であったが、今生では男子に属する。

しかし、何の因果か男の娘というモノに外見が固定されており、社会風潮も相俟って女性らしく育まれてしまった。泉井くんをご同輩と呼んだのはそういう意味だ。

無論、先に挙げた『ＩＳ』とかいうモノが関わっているのだが、この世界では男性蔑視はむしろ見当たらず、なんだか性意識の逆転現象が起こっている感が見受けられる。

証拠はボディビルダーに対する高町さんの反応。

……鼻血を吹いて蹲るとは、流石の私も衝撃の映像であった。

というか、通報云々が危機意識に抱えられているのだから、その恰好を辞めるべきなのではと思うのは私だけだろうか。

なんだ。このひとたち、実は単純に痴女なのか。

「ちょっとだけだよぉ、さきっちょだけさきっちょだけ」

「もう完全にアウトじゃないの！　そこの子逃げて！　私がこのひとを抑えつけてるうちに！　はやく！」

目の中にハートを作りながら鼻息荒く寄ってくる女子を見上げつつ、促されるままに全力ダッシュを決める。

こんなところで貞操の危機に陥るとか、まったく二次元は魔境である。

テンプレ転生したのに笑えない

「転生特典というモノはね、ぶっちゃけ大したものでも無いんだよ」
「はぁ……」

神と名乗ったそれを、私の目は『人』と形容することを許容しなかった。
正直、金も労力も然程必要ともせずに暇に飽かせるお気に入りの投稿小説サイトなどで騙られる、テンプレ転生という眉唾な代物に遭遇したい、とは微塵も考えられはしない。
そうしたモノを体感した結果、待っているモノは読み手や書き手の期待と、それにそぐわなければ『どうなるかわからない』という未来のみで、自らの努力や葛藤に関係なしに何かが決定づけられてしまう。
そんな世界に生れ落ちることは私が望むものでは決して無く、そういったモノに今遭遇してしまっているからこそ、もう何をやっても碌なことにならないのだろうなぁ、という無気力性が前面に押し出されて対応している配慮などは微塵も露わにできやしない。

だからこそ、それを引き起こしているコイツは邪神か、それ相応のクズ系の何かなのだろう、と話半分に相手する準備だけが出来ている。

矮小な人間なればこそ、私はこういう奴とまともに相手したくは無いのである。

というか、概念存在に値する神仏悪鬼魔霊の類に人格に似た何かが形成されていて会話が成立する時点で、それは詐欺確定としか言いようが無いと思うのは私だけなのだろうか。

「世の中の能力や現象には限りがあってね、それらは人間の許容できる範囲までしか知られることはできない。『よくわからないもの』を自由にすることができないのは当然だけど、そういうギャンブルに進んで勤しめるのは破滅主義者か快楽主義者、または自己を分析できない向こう見ずくらいしかいない。それに、そもそもわからないものは形にできないから、無理矢理に自分のルールに当て嵌めて形作れば、結局は別個にある既存と大差のない『何か』にしか成り得ないわけだね」

禅問答みたいなことをつらつらと並べられる。

合いの手を入れることも億劫なのだが、それはそのことに何も言わず、本題は此処からだ、と指を立てた。

「そのうえで、転生特典と云うモノを解析しよう。それらはボクたちのような狭窄な世界を形成する者たちが思い思いに描く個人にできる範囲の決定づけられた限りなく不自由に近しい『自由』だ。能力であったり、現象であったり、才能であったり、資産であったり、因果であったり、試練であったり、宿題であったり、大なり小なり善しなり悪しなり、それらはボクらが望んでも得られなかったり、誰かに下せば面白いだろう、という意図を基に決定づけられる。しかし、オリジナルには『成り得ない』」

手を広げる。

パフォーマンス性だけは抜群だ。

「人間の発想には限りがあるからさ。知識は基本的に先人の受け売りで、知恵はそれを元手に育まれて形作られる。結局のところ、何かが出来てもそれは改善または劣化した複製でしかなく、人間は限られたリソースを上手くやりくりして『次』へ繋げてゆくことしかできやしない」

……意外と考えさせられることを言う。

ところで、いま何の話をしているのであったっけ。

「つまりボクらの与える特典は、結局のところ何かのデッドコピーでしかない。そのうえで、ボクは語りたいわけさ。キミに与える特典のことを」

「あ、決定されてるんですね」

もはや自由に選べる転生特典なんかは時代遅れなのだろうか。

まあ、世の中自由にならないことばかりなのだから、死んだ後も自由が無いのはわかりきっていた。

「キミに与える特典は『ギャルゴ!!!!!』の主人公の性質だ」

「ギャ、ギャル語？」

しかし、全く知らないモノを持ってこられたら、どうしたらいいのだろうか。

いくらコレが詐欺師だとしても、寄越されるモノに罪は無い。

私は恐る恐るどういうモノなのかを問うと、しょうがねえなこいつは、みたいな目で見られた後に説明をもらった。負けない。

「ひとむかし前のライトノベルでね、異常な事件に遭遇すると身体能力が向上する。それは事件の規模に合わせて倍率ドンされるが、通常時はあくまでも普通の身体だ。制限付きのヒーロー、好きだろう、こういうの？」

……意外とまともな特典でびっくりした。

「しかも、主人公は自身の得物を強化できる。強化した得物で事件の中心、すなわち原因を叩けば事件を終わらせることができる。原因を破壊する、または治療することで『元の状態』や『正しい状態』へと『回帰』させられる『解決方法の自由』が備わっている。主人公は中学生だったはずだが、彼は物干し竿で事件解決に勤しんでいた。言葉にすると恰好はつかないが、ご町内の平和を守るヒーローとしては、中々に素晴らしいと思わないかね？」

なにそのアロンダイトの上位互換。

しかも異常事件って銘打っていてもご町内限定で中学生が解決する程度なのだから、然程殺伐とした世界でもないことが伺える。

そしてそうしたモノをコレが用意しているということは、それなりに危険が少ない世界に送られる、という意味に通じるのでは？

「しかもだ、ボクが附加するのはその『能力』だけではなく『性質』だ。『能力』だけを投げ売ったとしても、それを上手く扱えるわけが無いからな、扱うための資質としてキミに『主人公』と同等の『性質』を備えさせてあげようという心付けだよ。気に入ってもらえたかな？」

私は無言で彼の手を取っていた。

そこまで危ない橋を渡らさせられないのだということを教えられて、それを無碍にすることは人間不信が極まるというモノだ。

がっしりと握手をし、アンタサイコーだよ、と賛辞を贈る。

はっはっは、と笑い返されて、私たちは十年来の友人のようにお互いに笑い合った。

「――ちなみに『性質』を附加する以上、主人公が持っていた『人外の女子に好かれる呪い』もついてくるのだが、構わないよね？」

送られる直前、そんな言葉を投げかけられる。
チクショウ、コイツやっぱり詐欺師だった。